

# 韓国の西洋医学教育におけるアメリカの役割と限界

— 1880年代を中心に —

趙 承 勲\*

The American Role and the Limit of the Korean Western Medicine Education

— Focusing on the 1880s —

Seunghoon CHO

1886年3月29日、アメリカ北長老会派の宣教医たちが教師となり、韓国初の西洋式医学校が誕生した。朝鮮政府とアメリカ北長老会派がこの医学校を共同運営したが、設立して2年足らずに本来の教育機能は失われる。本稿では、韓国初の西洋式医学校の設立と運営に果たしたアメリカの役割と限界を追究した。当時の朝鮮社会では科举制度が依然として官職の登竜門であったため、医学校学生らは西洋医学教育を受けながらも科举試験準備をしなければならなかった。500年以上続いた科举制度の廃止は1894年のことである。1880年代、教育体制の抜本的な改革が先行されなかった状況下では、西洋医学教育は砂上の楼閣に過ぎなかった。また、アメリカ北長老会派内部で提起された批判などが相まって、韓国初の西洋式医学教育は目標軌道に乗らず、中断せざるを得なくなったのである。

キーワード 西洋医学教育、朝米関係、科举制度、宣教医、済衆院付設医学校

## 1. はじめに

2007年末現在、韓国における医師の総数は100,002人である。その中、言わば西洋医が87%の86,650人、漢方医は13%の13,352人となっている<sup>1)</sup>。今日、韓国において「医師」という職業は概して社会的かつ経済的な地位が保障される羨望の的となっている。それ故に、優秀な若者の大半が医師を目指し、医学大学に進学する場合が多い。このような傾向を懸念する声も少なくないが、果たして朝鮮時代の医師たちの社会的地位は今日のそれと同様であったのか。当時の医師とは漢方医を指すが、如何に西洋医養成を試みたのか。

韓国における西洋医学教育の萌芽期を対象とした先行研究<sup>2)</sup>では、当時の朝米両国関係の特質や朝鮮社会の制度的特徴などを考え合わせることなく、事実の羅列が一般的である。

本稿では、まず医師養成にみる朝鮮時代の社会的特徴を探り、当時の医師集団の社会的地位と身分的限界を明らかにする。そのうえ、西洋医学を受け入れる時の朝鮮社会の状況を浮き

---

\* 尚綱学院大学 非常勤講師

<sup>1)</sup> 2007年末、医師・看護師・薬剤師など医療業関連者は合計368,657人に至っている。韓国統計庁『韓国統計年鑑』第55号、2008。

<sup>2)</sup> ① Park-HyoungWoo『韓国近代西洋医学教育史』、青年医師、2008。（韓国語）② 奇昌徳『韓国近代医学教育史』、アカデミア、1995。（韓国語）③ 佐藤剛蔵『朝鮮医育史』（復刻版）、佐藤先生喜寿祝賀会、1980。

彫りに、1880年代を中心に韓国初の西洋式病院と西洋式医学校の出現過程を探究する。そして朝米関係の特質と漢方医養成にみる朝鮮社会の制度的特徴を考慮した上、韓国における西洋式医学教育の胎動に果たしたアメリカ側の役割とその限界を明らかにする。

## 2. 朝鮮時代における医学教育の特徴

### 2-1. 朝鮮時代初期の医寮政策

1392年、革命によって開国に及んだ朝鮮王朝は高麗時代の仏教中心体制を儒教一本化社会に変えるなど、内外に刷新政策を取らねばならなかった。医事の面においては、国民に仁慈の恵沢を施し医学の発展を期さねばならなかったと見ることができる。早速1393年、朝鮮各道に医院を設け医学教授を行い、教科書として高麗末期の医書である「郷薬惠民経験方」が使用された<sup>3)</sup>。次いで1397年、漢城（現・ソウル）に「済生院」を設置し医療の普及と郷薬の貢納を当らしめる一方<sup>4)</sup>、翌年には済生院で「郷薬済生集成方」30巻を編纂した。ハングル文字の公布で韓国民に尊敬されている世宗（1419～1450）時においては、「郷薬済生集成方」を増補して「郷薬集成方」85巻を編成し医薬学の教科書として使用するなど<sup>5)</sup>、郷薬つまり朝鮮産の薬材を有効利用することを奨励する一連の医療政策が展開したとみてよい。これは、長年中国に医学説や医療技法を依存したものの、使用薬材類は郷薬に頼るように励み、また漢方医を育てる教育方法についても朝鮮独自のものを確立・普及させるといういわば医療振興政策ともいえよう。

その後1485年、開国時から編修してきた「経国大典」が完成されるに至る。この「経国大典」は今日の六法全書に当たるものであり、朝鮮文化の大半はこの経国大典の法規に束縛されたものと言っても過言ではない。経国大典に医学教育や試験など医事制度のことが示されている。

### 2-2. 経国大典にみる朝鮮医学教育

朝鮮時代の医師（漢方医）は中人階級によって構成される。朝鮮社会は大体四階級からなる身分制度を固く維持してきた。第一階級は文官と武官の両班（ヤンバン）、第二階級は殆ど総じて両班の庶子の子孫である中人（チュンイン）、第三階級は農民などの平民（ピョンミン）、そして第四階級は奴隷に当たる奴婢（ノビ）である。これら階級には幾分か疎通はあるものの、原則としてどこまでも血縁による厳しい階級制度である。両班階級で医薬学に詳細な知識を持つ者もあるが、彼らにとって医薬学の知識は儒学（朱子学）を遂行するに当たり単なる教養に過ぎない。また、仮に平民と奴婢階級で医療技法を身に付けた者があっても医学的治療を施すことは認められない。要するに、朝鮮社会では実際の医療活動はほぼ百パーセント中人階級の医師が担当したといえる。

ここでは、中人階級の若者が医学を学ぶ順序と医学試験制度について簡略に述べる。まず、医学を学ぶ順序である。幼童時には両班子弟と同じく、各町にある現在の小学校に当たる「書

<sup>3)</sup>『朝鮮王朝実録太祖実録』3巻（1393年1月29日）の原文を和訳すると次の通りである。「地方には医薬をよく知っている人がいないので、各道に医学教授を送って医院を設置し…生徒教育には「郷薬惠民経験方」を使用し…病気にかった人がいれば直ちに救療するように…」

<sup>4)</sup>『朝鮮王朝実録太祖実録』12巻（1397年8月23日）

<sup>5)</sup>『朝鮮王朝実録世宗実録』60巻（1433年6月11日）

院」・「書堂」あるいは家族や近親戚から「千字文」・「小学」・「四書五経」などを教えられ、学問の基礎的知識を得る。その後、「惠民署」<sup>6)</sup>あるいは「典医監」<sup>7)</sup>に所属し医学生徒として医学を学ぶ。また各地方においても医学生徒を採用した<sup>8)</sup>。これらの生徒（約3,400人）<sup>9)</sup>は定められた教科書<sup>10)</sup>を勉強し、また実地教育実習を受ける。その後、科举制度で定められた各試験に臨むわけである。毎年2回の定期試験があり、合格すれば、各役所の担当医である「月令医」、地方の医師である「審薬」、宮廷の医薬に関する事項に掌った内医院の医師「薬房」などの医師に任ぜられる。この3種類の医師として一生を終わる者が大半であるが、さらに立身出世しようとするならば、高等官試験に当たる医科試験を受けるのである。この医科試験は両班階級の子弟らが受ける文武科試験と同じく3年に1回実施するが、他に国家の慶事等があった場合に臨時試験が行われる。しかし、文武科試験は「郷試」「進士試」「生員試」「殿試」などの複数の試験に合格しなければならないが、医科試験は「初試」と「覆試」との二つの試験のみである。医科試験ではおよそ初試で18人、覆試で9人が合格する。初試続いて覆試に合格すれば、その成績に従い品位が与えられ、臨時職を経てそれぞれの官職に補せられるのである<sup>11)</sup>。

### 2-3. 医師集団における身分制度の限界

以上、中人階級が医学を学ぶ順序と医学試験制度などを述べた。古くから朝鮮半島は中央集権的官僚制の国家体制を堅持してきた。中国の隋時代に始まり唐代に定着した科举制度が高麗時代に朝鮮半島に流入されると、中央集権的官僚制が一層強くなり、朝鮮時代を貫いていく。朝鮮時代の中人階級出身者は、前述の通り、医師になるためには「経国大典」に定められた定期試験、さらに立身出世のためには医科試験を通らなければならなかった。彼らが医科試験をパスし高官職にまで至っても中人階級という身分上の限界と制約から逃れることはなかった。中人医師が高位官職に任命される度に、両班の高位官僚たちは中人階級という賤しい身分を高位官職に登用してはいけなと反対したと言われる<sup>12)</sup>。

一般的に、朝鮮時代の医師の仕事は苦しく、中人身分の若者は医師になることを嫌って避ける傾向が強かった。当時の医師は医療活動を行うにあたり彼らを補助する医療補助員を自ら雇用し教育せねばならないなど、今日の医師の地位とは程遠く、社会的かつ経済的地位が保障されることはなかったとみてよい。したがって、若い中人階級の子弟らは医師の代わりに貿易業務を担当する訳官を目指し、訳科試験を準備するケースが少なくなかった。当時の医師の社会的地位を窺える一例がある。ある両班高官が数十日もかかる観光旅行の医療随行を要求すると、宮廷医（御殿医）の地位までのぼった19世紀の著名な御医・李顥養（1783～1852）ですらその要求に応じるしか方法がなかったという<sup>13)</sup>。これは、いくら高官医師であっても中人

<sup>6)</sup> 一般庶民の治療と医学教育を担当した官庁。大典会通（経国大典の続編）によると生徒定員は62人。

<sup>7)</sup> 宮廷で使う医薬の供給に関することと医学教育を管掌した官庁。大典会通によると生徒定員は56人。

<sup>8)</sup> 朝鮮の行政体制は全国を8道とし、6府・5大都護府・20牧・74都護府・73郡・154県が置かれた。各地方の医学生徒定員は、府：16人、大都護府と牧：14人、都護府：12人、郡：10人、そして県：8人。

<sup>9)</sup> 地方の医学生徒総数は、6府・16人＝96人、5大都護府・14人＝70人、20牧・14人＝280人、74都護府・12人＝888人、73郡・10人＝730人、154県・8人＝1,232人、などを合わせると3,296人に至る。

<sup>10)</sup> 「纂図脈」「本草」「東垣十書」「直指方」「医学入門」「素問」「銅人經」「医学正伝」とその他関連医書や参考書。

<sup>11)</sup> 『大典会通』上巻、ソウル大学校奎章閣編、1999、pp.331-332。

<sup>12)</sup> 金良洙、安相佑「朝鮮後期の医官家系の活動」『東方学志』第136輯、延世大学校国学研究院、2006、p.72。

<sup>13)</sup> 同上書、p.73。

身分である以上、両班身分の要求に従わなければならない朝鮮社会の身分制度の限界性を物語っている。

以上のような社会的特質を堅持してきた朝鮮社会に西洋医学及び西洋医学教育が如何に流入され定着しようとしたのだろうか。

### 3. 西洋医学書籍の流入と実学者たちの動向

#### 3-1. 西洋医学書の来朝

西洋医学書の流入は中国を経由する間接的なルートしかなかった。朝鮮後期、代表的な西洋医学書としてまず、中国でカトリックの伝道活動を行ったドイツ人宣教師・シャルポンベル (Johann A. Schall Von Bell: 1591 ~ 1666) の著作『主制群徴』(1629年)がある。また、同じく中国で活動した英国人宣教師・ホブソン (Benjamin Hobson: 1816 ~ 1873、中国名: 合信) が中国人の助手・管茂材の協力を得て著した『全体新論』(1851年)、『博物新編』(1855年)、『西医略論』(1857年)、『内科新設』(1858年)、そして『婦嬰新設』(1858年)などが挙げられる。これらの書籍は既に西洋医学書籍が翻訳・出版されていた日本でも紹介され、翻刻版として広く普及された。ホブソンの書籍らは、西洋医学知識の紹介のみならず、中国医学の内容をも吸収した特徴がある。特に、治療の理論と薬物の分類では陰陽五行説を排除したものの、それ以外は中国医学の理論に従って著した書籍である<sup>14)</sup>。

#### 3-2. 西洋医学書の来朝と朝鮮の実学者たち

西洋医学書が中国を通して朝鮮半島に紹介されると、李翼 (イイッ: 1682 ~ 1763)<sup>15)</sup>、李圭景 (イキウキョン: 1788 ~ ?)<sup>16)</sup>、丁若鏞 (チョンヤギョン: 1762 ~ 1836)<sup>17)</sup>、そして崔漢綺 (チェハンギ: 1803 ~ 79)<sup>18)</sup> などの実学者<sup>19)</sup> たちが大きな関心を見せた。彼らは自分の著書の中で、東洋医学の陰陽五行説などの抽象的理論に対し西洋医学は的確な解剖学知識を土台にして成り立っていると高く評価している。しかし彼らの関心事は、国レベルより少数実学者の各々の好奇心を充足させるものに他ならなかったのである。

1797年、丁若鏞は『麻科会通』の付録「種痘心法要旨」で、疱瘡(天然痘)が伝染病であると説明しながら、免疫学的な予防法として種痘医術を記述している<sup>20)</sup>。これが牛痘法を紹介した韓国初の著作である。この著作は紛れもなく西洋医学をもとに著したものであり、西洋医学教育の一面を成しているものの、あくまでも個人的な関心事に過ぎなかったと見る事ができよう。

以上のように、西洋医学に対する実学者たちの深い関心にもかかわらず、国レベルでの積

<sup>14)</sup> Park-HyoungWoo『韓国近代西洋医学教育史』、青年医師、2008、p.10.

<sup>15)</sup> 彼は著作『星湖僊説』の中で『主制群徴』の内容を紹介し、生理原則、血液、呼吸、そして脳脊髄神経などを説明している。

<sup>16)</sup> 彼は著作『五州衍文長箋散稿』の中で『主制群徴』の内容を紹介している。

<sup>17)</sup> 朝鮮実学の集大成者として誉れが高い。

<sup>18)</sup> ホブソンの著作を根拠に『身機踐験』を著した。

<sup>19)</sup> 朝鮮実学者たちは、中国の西学や考証学に造詣が深く、社会問題の解決を志向し、科学技術・医学に関する知識が豊富であった。また真摯な朱子学者でありながら、朱子説を全面的に信じるのではなく、それを批判し反対するところもある。

<sup>20)</sup> 丁若鏞「種痘心法要旨」『韓国医学大系』36、驪江出版社、1988、pp.602-623.



極的な対応が遅れたために、韓国人が西洋医学教育を受けるまでは長い歳月を待たねばならなかったのである。

### 3-3. 開港以降における西洋医学の出現

朝鮮王朝は19世紀に入っても鎖国を堅持していたが、1876年に日朝修好条約が締結され、釜山（プサン）をはじめ、仁川（インチョン）と元山（ウォンサン）などが開港した。釜山は開港により、これら三つの港町の中でも、特に日本からの人と物が朝鮮へ侵入する玄関口の役割を余儀なく担わねばならなかった。開港から1年後の1877年2月に、日本海軍により「官立済生医院」<sup>21)</sup>が釜山に設立され、日本人居留民を対象に種痘の接種を施した。この医院が日本人居留地に設立された韓国<sup>22)</sup>最初の西洋式医療施設である<sup>23)</sup>。

韓国医学の西洋近代化の父・池錫永（チソギョン：1855～1935）<sup>24)</sup>は上述した『麻科会通』などの西洋医術書を精読しており、接種の重要性をよく理解し、1879年10月から2ヵ月間、官立済生医院で院長の松前譲と海軍軍医の戸塚積齊から接種手技を学び<sup>25)</sup>、痘苗と種痘針が入手できるようになった。その直後、釜山から漢城に向かう途中、妻の郷里の忠州郡徳山面へ12月25日に立ち寄って、2歳の義弟の子に種痘を行った。これが韓国人によって韓国人に施された最初の種痘の接種であり<sup>26)</sup>、韓国における西洋医学の夜明けといえよう。日本初の種痘の接種は、1849年に佐賀藩の医師・植林宗健と長崎のオランダ人医師・モーニッケが種痘を実施したこととされるが、日韓両国における西洋医学（種痘）の受け入れ時期には30年の隔たりがあったと見ることができる。

## 4. 朝米修好通商条約と西洋医学病院の誕生

1882年5月22日、朝米両国間に公式的外交関係が結ばれた。19世紀半ばまで、朝鮮はアメリカに関する知識や情報を主として中国経由で得られる程度にとどまっていたようである。ここでは、朝米修好通商条約の樹立にみる両国の思惑を分析し、韓国初の西洋式病院の設立と運営に照らし合わせる。

### 4-1. 朝米修好通商条約の意味

朝米修好通商航海条約とも呼ばれる1882年の条約は全14条からなるものである。主な内容を見ると、第三国より不当な圧力がかけられた時に一方の国は仲裁する義務を規定した他に、最恵国待遇と外国人雇用に関する規定、領事館の設置、治外法権に関する規定などである。朝

<sup>21)</sup> 1876年、漢城（現・ソウル）へ派遣された宮本小一外務大丞が釜山に滞在していた際に、海軍大軍医の矢野義徹が釜山に医院設置を求めたのがきっかけとなって設立された。この医院が設立される以前、当時對馬藩の御雇医者として高田英策という人が在釜日本人に治療を施していたが、増えつつあった日本人を治療するには不十分なものであった。また風土病を含む様々な疾病の流行を懸念するなど、当時の釜山は不潔極まりないところだという認識が日本人に支配的であった。従って釜山に居住する自国民を保護するために、医療施設の設置が不可欠なものであったといえよう。

<sup>22)</sup> 便宜上本稿では朝鮮半島全体を意味する用語として「韓国」を使用する。

<sup>23)</sup> その後、日本人居留民を対象として元山港に「生生医院（1880年）」、漢城に「公使館医院（1883年）」、そして仁川港に「領事館付属病院（1883年）」などが設置された。

<sup>24)</sup> 1876年、修信使・金綺秀の通訳官として来日した師匠の漢方医・朴永善から久我克明の『種痘亀鑑』を受理して以来、種痘に深い関心を持つようになる。

<sup>25)</sup> 奇昌徳『池錫永先生の生涯』、アカデミア、1994. p.26.

<sup>26)</sup> 最初の種痘接種が成功裏におさまリ、その後、同村の子供40人にも種痘接種を施した。

鮮政府はこの条約の中でも、第三国より朝鮮に対し不当な圧力があつた場合、アメリカが仲裁するという規定を拡大解釈した。というのは、朝鮮政府はその後の多くの場面で第三国から圧力を受ける度にアメリカに仲裁を求めたのである。しかし実際には、朝鮮政府は1884年の甲申政変以降の日清両国の軍事的対立、1885年のイギリスの巨文島占領、日清戦争、そして日露戦争などの事態を收拾するためにアメリカに仲裁を要請したが、アメリカの反応はいずれの場合でも否定的であつた<sup>27)</sup>。アメリカの対朝鮮政策の内容は、日露戦争直後1905年11月28日、駐朝鮮公使館を閉鎖するまでアメリカ政府が下した訓令において鮮明に示されている<sup>28)</sup>。

この時期、「朝米修好通商条約」について朝鮮側は朝鮮の独立を維持する目的・手段として拡大解釈する一方、アメリカ側は自国船員の保護に主な目的があつた。つまり、アメリカは朝鮮半島に対して積極的な外交政策を取るほどの利害得失をもたず、魅力を感じていなかったといえる。当時、朝米両国間には熱くも冷たくもない関係が続く中で、韓国初の西洋式病院がアメリカ宣教医の協力のもとで偶然現れるようになる。

#### 4-2. 韓国初の西洋式病院の設立

長年、東洋医学を重んじてきた韓国はアメリカ医療宣教師の来韓を契機として初めて西洋医学と直接出会うようになる。医療宣教師（宣教医）は医療活動を通じ人々に仕えつつ、伝道する宣教師であるが、これは伝道を目的に医療を施し外来宗教への反感を和らげるという欧米諸国の典型的な伝道パターンの一つである。

安連（Horace Newton Allen：1858～1932、以下「安連」と記す）は、アメリカ北長老会派の宣教医として中国を経由して1884年9月に漢城へ到着し、アメリカ公使館の無給医師となり、韓国に居留する最初の西洋人医師として歴史に名を刻むことになる。ところが、彼が漢城に来てから間もない同年12月に韓国近代史の中で大きな転換点ともいえる「甲申政変」<sup>29)</sup>が起こり、当時の王妃（閔妃）の甥にあたる閔泳翊が大けがを負い命さえ危うくなり兼ねない事件が発生した。閔泳翊の治療に当たり十数人の漢方医は適切な治療を施せず、右往左往していた。そこで急きょ、安連が呼び出され緊急治療を行い<sup>30)</sup>、その後、3か月間の安連の治療によって閔泳翊は完治できるようになった。偶然ともいえるこの事件をきっかけに安連は朝鮮宮廷からの信頼を得るようになる。その後1885年1月27日、駐朝アメリカ代理公使フォーク（George C. Foulk）の書簡とともに、「病院設立案」を朝鮮政府に提出し、西洋式病院の必要性を説いた<sup>31)</sup>。これが、朝鮮政府に受け入れられ、1885年4月、漢城齊洞に韓国初の西洋式病院「済衆院（チェジュンウォン）」<sup>32)</sup>が誕生したのである。その後、アメリカ北長老会派などか

<sup>27)</sup> 趙承勲『韓国は如何に日米両国と関わってきたのか』、東北大学出版会、2008、pp.19-21.を参照。

<sup>28)</sup> ①1885年8月19日、米國務長官 T.F.Bayard が Foote 公使宛の訓令において、「朝鮮は中・日・英・露の利害関係が相いれないところなので、どちらにも味方にしない、そしてどのような策謀にも介入しない、ということがアメリカの国家利益にかなう」と指摘し、「この訓令を必ず遵守せよ」と強調した。②日清戦争直後、1895年11月、米國務長官 Richard Olney が John M.B.Sill 公使宛の訓令において、「日本を刺激する朝鮮の政治問題は貴下の権限外の問題であるので関与しないこと」と注意を喚起した。③1896年から1898年の間、ロシアが朝鮮半島の優越権を掌握した時期においてもアメリカは微温的な態度をとった。④日露戦争後の1905年7月29日、米戦争省長官 W.H.Taft と日本国首相桂太郎との密約の内容。

<sup>29)</sup> 金玉均らの開化派によって起こったクーデター。

<sup>30)</sup> 安連が施した治療は、漢方医術とは異なり、まず、7か所の刺傷を消毒し、27針を縫い、八つの絆創膏を付けたという。Park-HyoungWoo『済衆院』、モムグアムム、2002、pp.45-50.

<sup>31)</sup> 金源模訳「病院設立案、1885年1月22日（金）」『安連の日記』、壇国大学校出版社、1991.

<sup>32)</sup> 当初の名称は「広恵院」であつたが、2週間後に「済衆院」と改称された。この「済衆」は『論語』の中の「博施濟衆」の略字で、広く人民に恩恵を与え、民衆を苦しみから救済することを意味し、朝鮮政府の医療政策の断面が窺われる。

ら宣教医が送られたが、済衆院で活躍したアメリカ宣教医は、安連をはじめスクラントン (William B.Scranton: 1856 ~ 1922)、ヘロン (John W.Heron: 1856 ~ 1890)、そして婦人科担当女医のエレルス (Annie J.Ellers: 1860 ~ 1938) などである。「済衆院一年次報告書」<sup>33)</sup> によれば、彼ら宣教医は一日 50 ~ 70 人の患者を診るほど多忙を極める毎日を送り、設立後 1 年間で合計 10,640 人にのぼる患者の治療を施す傍ら宣教活動も行ったのであろう。

このように、韓国初の西洋式病院の出現は朝米両国の外交的関係からその必要性が問われ計画性を持って現れたものではなく、偶然現れたものである。そこにはアメリカ北長老会派の伝道活動に対する思惑もあったわけである。というわけで、済衆院は、病院建物・医療補助人・病院運営費などは朝鮮政府が負担する、そして医師の給料と病院運営に関してはアメリカ北長老会派などが担当する、という二重構造下で運営されたのである。従って、済衆院の将来性はアメリカ北長老会派宣教部の宣教方針に深く関連するものであり、その後に現れた済衆院付設医学校の将来性も同様であったと言わざるを得ない。

## 5. 韓国最初の西洋医学教育

### 5-1. 済衆院付設医学校の設立

1885 年 1 月 27 日、安連らが朝鮮政府に提出した「病院設立案」の中には、「ここは若者に西洋医学と保健学を教える機関になるでしょう。」<sup>34)</sup> と記されている。これは済衆院を設立する当時、アメリカ北長老会派をはじめ、宣教医安連は済衆院を単なる病院のみならず、韓国民に西洋医学を教育する場としても考慮していたことが分かる。もちろん、彼らは西洋医学を韓国民に教えることが韓国民に対する宣教活動とスムーズにつながる効果を期待していたことは言を俟たない。済衆院が設立してから約 1 年後、安連などの宣教医は多忙な医療活動を施す中でも、済衆院付設の医学校つまり西洋医学を教える場を設ける動きに出たわけである。済衆院の開院一年後には済衆院の活躍が自他共に許すものとなり、また、朝鮮宮廷からの信頼を得ていた<sup>35)</sup>。このような状況の中で、宮廷医の地位を与えられた安連らが付設医学校の開校に必要な諸費用を朝鮮政府に求めたところ、国王・高宗は直ちに校舎の購買を含むその他諸経費を下賜した<sup>36)</sup>。

かくして 1886 年 3 月 29 日、安連、ヘロンとアンダーウッド (Horace G.Underwood: 1859 ~ 1916) が教師陣として、競争試験を通し選抜された 16 人の学生を以って済衆院付設医学校<sup>37)</sup> が開校した。彼ら教師陣は、大体 1880 年代にアメリカの医科大学を卒業し、または卒業後に

<sup>33)</sup> Park-HyoungWoo, Yoe-InSeok 「済衆院一年次報告書」『延世医史学』3 巻、延世大学校、1999。

<sup>34)</sup> Lee-KyoungRok 他「広恵院の開院と済衆院への改称過程」『延世医史学』2 巻、延世大学校、1999、pp.478-570. 'Also, it would be the means of instructing young men in Western Medical and Sanitary Science.'

<sup>35)</sup> 『朝鮮王朝実録高宗実録』23 巻 23 章 (1886 年 5 月 13 日) では、国王高宗は「アメリカ医師・安連とヘロンは医術が精密で心も優しく、多くの人々に治療を施したので皆特別に堂上の品階に載せて奨励する意を表わせと命じた」と記されている。ここでいう「堂上の品階」とは朝鮮時代の高位官職全体を指す。

<sup>36)</sup> Park-HyoungWoo, Yoe-InSeok 前掲書、p.13。

<sup>37)</sup> この医学校の名称は、①朝鮮政府の学生募集記録では「済衆院学堂」、②済衆院一年次報告書では、「School of Medicine under the Hospital Management」あるいは「School Department」、③安連の日記では、「Medical and Scientific School in Royal Corean Hospital」、④日本の朝野新聞 (1886 年 7 月 29 日) では、「済衆院医学堂」と表記されているなど様々であり、本稿では「済衆院付設医学校」とする。

医療活動あるいは医学教育の経験を持っていた。したがって、済衆院付設医学校での教師資格は十分にあったと言ってよい。安連は、1881年、米オハイオ州のウェスレヤン（Wesleyan）大学理学部を卒業した後、コロンビア大学で1年間医学を勉強し、1883年3月、マイアミ（Miami）医科大学を卒業した。ヘロンの場合、1883年、テネシー医科大学を首席卒業し、開業医として働いた後、宣教医になった。そして宣教師のアンダーウッドは医師ではないが、1881年ニューヨーク大学卒業後、1年間医学を学んだことがある。

この医学校の第1期入学生について、唯一の記録は日本で発行された1886年（明治19年）7月29日付の朝野新聞である。この新聞の2面には「朝鮮通報」という記事がある。

「…さきに醫學堂を済衆院に設け子弟の英才なるもの十三人を選びて化學英文醫術製藥等の事を習いしけるが其藝道の精通するを待て普く世民を救恤する目的なると云ふ…」

要するに、この医学校は優秀な若者に西洋医学を学ばせ、朝鮮民衆を救い恵むことを目的ととなっている。またこの記事には、学生12人と教師陣の名前などが載っている。まず、教師陣の名前と担当科目が記されているが、化学教師は安連、医師として蕙論（ヘロン）、そして英語教師は元徳禹特（アンダーウッド）となっている。また、1886年7月末頃に本科生として決められたと推定される12人の氏名が確認できる。彼らは韓国人最初の西洋医学校の学生として名を挙げている。彼らの名前を新聞掲載順に書く、李宜植、金鎮成、禹濟翌、李謙来、金震声、崔奎星、崔鐘岳、尹鎬、李軫鎬、秦学洵、尚瀟、高濟桑などの12人である。この新聞記事には「一人欠」となっているので、13人中一人の氏名は不明である。「済衆院一年次報告書」には当時の医学校運営と方針を窺える内容があるが、次の通りである。

長老会のアンダーウッド牧師に医学校仕事を手伝ってこないかと要請した。彼は医学過程を一部履修したのでこの仕事に適合した人物だと思う。彼はこれを受諾した。医学校は1886年3月29日に競争試験で選抜された16人の学生でスタートした。この学生たちに可能な限り早く英語を教えた。一部の学生の英語実力が一定水準に到達したので、我々は間もなく彼らが科学勉強を習うことができると期待している。朝鮮政府との合意で採択された学校規則によって彼らは4ヶ月間の試験段階を経た後に12人を選抜し、正規過程に編入させる予定である。残り4人は落第させる予定である。12人の学生を毎年選抜する予定である。彼らには食事、寄宿舎、学費を提供するとともに教育過程を履修すれば「主事」という政府官僚で登用されるだろう。彼らは朝鮮政府と医学校教師の許諾なしでは中退することはできない。朝鮮海軍の初めての軍艦が就航することになれば私たちは軍医官1人をその軍艦に送れることを希望する<sup>38)</sup>。

<sup>38)</sup> Park-HyoungWoo、Yoe-InSeok 前掲書、p.13.



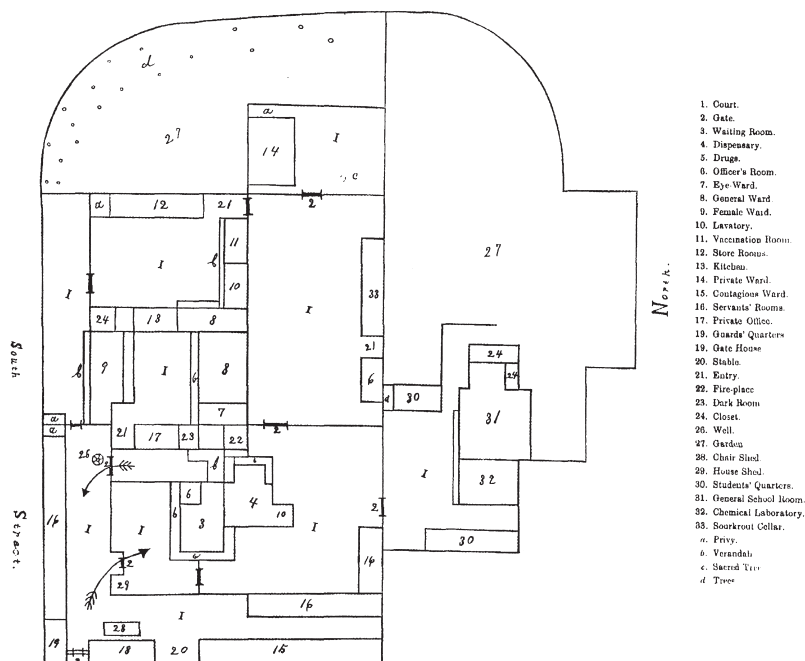


図1. 濟衆院（図の左側・南側）及び付設医学校（図の右側・北側）の配置図

資料：Park-HyoungWoo, Yoe-InSeok「濟衆院一年次報告書」『延世医史学』3巻、延世大学校、1999、p.50.

濟衆院付設医学校の建物は濟衆院のすぐ隣の建物を改造したものである。安連らが描いた図1の30番は学生寮、31番は講義室、32番は化学実験室となっている。当時、安連は通訳なしで患者診療を施すほどの韓国語実力を有していたが、アンダーウッドの方が比較的に流暢な韓国語を駆使する能力があったので濟衆院付設医学校の教育運営に大きく貢献したと言われる<sup>39)</sup>。学生たちは英語の教育を受けてから数学・化学・物理などの基礎科学科目を学び、所定の子科課程を終えた学生には解剖学・生理学・医学を教育した<sup>40)</sup>。ところが、具体的な教材と教育内容については確認することができない。

## 5-2. 韓国最初の西洋式学校の設立と限界

ここでは、濟衆院付設医学校とほぼ同時期に設立した韓国初の西洋式国立学校の設立と特徴を簡略に述べる。濟衆院と付設医学校の設立と運営には既に述べたようにアメリカの北長老会派と朝鮮政府の二重構造下という仕組みで行われたが、韓国初の西洋式国立学校の設立にはアメリカ政府の協力が欠かせなかった。1882年5月、朝米間に外交関係が結ばれ、朝鮮政府は1883年、アメリカに報聘使を派遣し、政治及び軍事顧問とともに学校教師の招聘を進めた<sup>41)</sup>。

<sup>39)</sup> L.H.Underwood 著、李萬烈訳『アンダーウッド初めて来韓した宣教師』、基督教文社、1993、p.43.

<sup>40)</sup> 医学校に「骨格標本：skeleton」があったことを鑑みると、ある程度の教育内容が窺える。D.L.Gifford, Education in the Capital of Korea, The Korean Repository, Vol.3 (1896), Paragon Book Reprint Corp., New York, 1964, p.308. '...including a skeleton that has been frightening people ever since its arrival in the country.'

<sup>41)</sup> 李光麟「育英公院の設置とその変遷」『韓国開化史研究』、一潮閣、1969、p.160.

1884年の甲申政変のため、当初の計画より2年遅れた1886年7月4日にハルバート(Homer B. Hulbert)をはじめ3人の教師が招聘され、本格的に学校設立に向けて準備し始めた。この学校の設立目的は外国との交渉に必要な語学能力を備えた官吏を養成することにあった<sup>42)</sup>。学生は現職若手官吏(左院:14人)と両班高官の弟子(右院:21人)を選拔し、1886年9月23日、韓国初の西洋式国立学校「育英公院(Royal English School)」が設立した。当時、語学に関する仕事は医療業と同じく中人階級の専業であったが、なぜ両班官吏と両班弟子を対象に語学教育を行おうとしたのか。朝鮮政府は門戸開放とともに欧米資本主義の急激な流入に適切に対応する官僚を養成し、欧米列強との交渉に当たり、交渉責任者が外国の語学を学ぶと同時に外交及び通商の儀礼や条目を習得することによって外国のトリックに陥らないようにしようとしたのである<sup>43)</sup>。この学校の修業年限は3年と定められ、学生募集は1886年(左院:14人、右院:21人)、1887年(左院:6人、右院:14人)、1889年(右院:57人)などの3回に限っているが、入学生総数は112人となっている。彼らは両班高官の子弟と一部の中人で構成された<sup>44)</sup>。彼らには語学をはじめ初等普通学(The Ordinary Elementary Studies)、基礎国際法(The Elements of International Law)、そして基礎政治経済学(The Elements of Political Economy)などが教えられた<sup>45)</sup>。朝鮮政府は積極的に「育英公院」を支援した。朝鮮政府の「育英公院」への支援と比べれば当時の儒学教育機関への支援が微々たるものだという不満の声が出るほどであった<sup>46)</sup>。

しかし、「育英公院」は当初の設立目的を成し遂げるまでには行かず、徐々にその勢いがふるわなくなる。その最大の要因は学生たちの学習意欲の不振である。学生たちは初期には義務的に寄宿舎生活をしたが、徐々に個人行動をとるようになった。学生たちに無料で寝食を提供したし、教科書などの書籍代はもちろん無料であった。しかも彼らには毎月タバコ代名目で6ウォン(600銭)ずつ支給された<sup>47)</sup>。このような政府の支援にもかかわらず、彼らの学習意欲は高くなく、はなはだしきは御輿で登校する学生もいたし、自分の教科書やタバコなどを持たせる下人とともに登校する学生もいたようである<sup>48)</sup>。学生の要求によって冬季の授業時間が6時間から4時間へ変わったり、現職若手官吏(左院)出身の学生たちは業務を口実に頻繁に欠席したりした。結局、朝鮮政府は学生たちの学習意欲不振、学校を運営する官吏の腐敗<sup>49)</sup>などの問題を克服せず、学校運営を断念するに至ったのである。

以上のように、朝鮮政府が朝米修好通商条約を締結(1882年)した後、アメリカの協力を求めた形で「育英公院」を設立(1886年)した。一方、既に検討したように、韓国初の西洋式病院・済衆院と済衆院付設医学校はそれぞれ1885年と1886年にアメリカ宣教医・安連を中心として設立・運営されていた。当時はまだ儒教教育が教育の中心を占めているなかで、儒学を

<sup>42)</sup> 『育英公院登録』、奎章閣図書番号 3374 (丙戌6月17日)。

<sup>43)</sup> 同上。

<sup>44)</sup> 金京美「育英公院の運営方式と学員の学習実態」『韓国教育史学』21、韓国教育史学会、1999、p.578。

<sup>45)</sup> D.L.Gifford 前掲書、p.285。

<sup>46)</sup> 『朝鮮王朝実録高宗実録』24巻(1887年3月29日)

<sup>47)</sup> 当時、定番メニューのソルロン湯(一食)が2銭5厘であった。

<sup>48)</sup> Kim-EunSin 編著『これが韓国最初』、Sammun、1996、pp.154-156。

<sup>49)</sup> D.L.Gifford 前掲書、pp.285-286. '...His Majesty's good intentions were frustrated by the speculating officials connected with the school, who diverted to the extent of their ability the funds of the institution to their own private uses ; so that becoming disheartened, first Mr. Gilmore, then Mr. Hulbert, and finally Mr. Bunker resigned and returned to America...'

学習していた人々がアメリカ人から直接西欧の言語と知識を学んだわけである。上記の二つの学校において3年以上教育を受けた学生は見当たらないことを鑑みると、彼らが果たして外交業務を担当するに当たり外国語を活用するほどの語学能力を身につけることができたのか、また、西洋医療分野で活躍できる程度の西洋医学全般を学習したかは疑問である。現に、上述した「朝野新聞」に記載された済衆院付設医学校の入学生12人の内、その後医師になった人は一人もいない。

なぜ、アメリカの協力のもとで、朝鮮政府が積極的に推進した西洋式教育機関が所期の目的を達成することができなかったのか。本稿では、彼らが受けた西洋式学習が彼らの出世と直結し難かったことに注目する。彼らは国家官僚になるためには西洋式教育を受けながらも、科挙試験の準備をも同時並行的に遂行しなければならなかった。1886年に育英公院（右院）に入学した学生のうち、その後、6割強の学生が科挙文科に合格し、官僚として活動している<sup>50)</sup>。これは彼らが西洋式教育機関に入学してからも、立身出世のためには続けて科挙試験準備を行わなければならなかったことを物語っている。彼らは、朝鮮開国以来当時まで堅持して来た官僚の登竜門、即ち科挙制度の抜本的改革がない限り、朝鮮社会における常識的な価値観ともいえる「科挙合格」イコール「立身出世」という考え方から抜け出すことができなかったと考えられる。

### 5-3. 済衆院付設医学校の運営と限界

以上のような状況は済衆院付設医学校の場合も大同小異である。済衆院付設医学校の開校後、この医学校に対する詳しい記録は、上述した「朝野新聞」の記事のみである。「朝野新聞」に載っている学生名簿をこの学校の第1期生と見なすならば、第2期以後の学生が選ばれたかどうかとも定かではない。したがって、本稿ではヘロンなど当時の医学校教師らの書簡を通し済衆院付設医学校の医学教育の内容を見てみることにする。

1887年当時、ヘロンは毎日1時間の講義を担当し、アンダーウッドはアメリカ北長老会派宣教部より講義に対する報酬を受けている。しかし、ヘロンは1日1時間の教育に与える時間すらなく、1887年11月以降は全く学生を教えることができなかった<sup>51)</sup>。つまり、済衆院付設医学校が開校して1年後の1887年には教育活動はほとんど行われていなかったと見ることができよう。このような状況になったのは、済衆院と付設医学校の産婆役を果たした安連が1887年9月に済衆院を辞任し、本国アメリカに帰国したことを見落としてはいけない。また、「朝野新聞」以外には済衆院付設医学校に関する記録がないことから鑑みると医学教育が円滑に進められていたとは考え難い。1888年に入ると、「育英公院（Royal English School）」のハルバートが済衆院付設医学校で毎日2時間ずつ教えたという記録<sup>52)</sup>があるが、これは医学教育ではなく、英語などの語学授業が中心であったと見ることができる。1889年当時、アメリカ北長老会派の海外宣教報告書<sup>53)</sup>によると、済衆院付設医学校には36人の学生が学んでいると記されているが、教育内容は英語教育が中心であったと考えられる。1887年9月に安連が

<sup>50)</sup> 金京美前掲書、p.585.

<sup>51)</sup> 「ヘロンがアンダーウッドに送った1887年2月13日と5月1日付の書簡」（出所：ヘロン著 Kim-Insu 訳『医師ヘロンの宣教レター：John W. Heron, M.D.'s missionary letters: 1885～1890』、クンラム出版社、2007.

<sup>52)</sup> 「ヘロンがアンダーウッドに送った1888年3月29日付の書簡」（出所：ヘロン著 Kim-Insu 訳前掲書）

<sup>53)</sup> Mission in Korea. The Fifty-second Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America. Mission House, New York, 1889, p.172.

帰国した後、済衆院付設医学校の教育内容は医学教育から英語教育へと変わり、1889年まで続いていた<sup>54)</sup>。

済衆院付設医学校は初期段階からアメリカの宣教医によって計画され設立されたが、朝鮮政府もその必要性を認めた故に可能となった。朝鮮政府は一部の財政的支援とともに学生募集を担当した。しかし、朝鮮政府の済衆院付設医学校への支援と期待とは裏腹に、西洋医師を輩出する真の医学教育までには至らなかった。上述した「育英公院」の場合と同様に、済衆院付設医学校の学生たちも官僚登竜門である科挙試験を受けなければならなかったとみてよい。表1で示すように、済衆院付設医学校で西洋医学教育を受けた学生はその後に医師ではなく、一般官僚として活躍している。彼らは西洋医師になる目的で済衆院付設医学校に入学したとは考え難く、当時の制度下で立身出世する一手段として西洋医学教育を受けたと考えられる。なぜなら、医学校修了後、彼らに医療関係の確実なポストが保障されるなど、当時の医学を含む教育制度を改革する動きは皆無に等しかったからである。また、表1の金宜煥の場合は、医学校に入学した年齢が48歳であり、医学校修了後に彼が医療関連の仕事に従事しようとしたとは推察できないからである。

表1 済衆院付設医学校の第1期学生の経歴表<sup>1)</sup>

No.	氏名	生没(入学当時の年齢)	科挙歴 <sup>3)</sup>	主な職歴
1	尹鎬	1870～？(16歳)	不明	陸軍歩兵正尉(1907年)
2	崔鐘岳	1868～1949(18歳)	不明	公州郡灘川面長(1913～39年)
3	李軫鎬	1867～1946(19歳)	武科合格(1882年)	朝鮮総督府学務局長(1924年)
4	李謙来	1865～1911(21歳)	雲科合格(1885年)	沃溝港裁判所判事(1903年)
5	李宜植	？～？(？歳)	不明	京畿道漣川郡守(1904～07年)
6	金宜煥 <sup>2)</sup>	1828～1891(48歳)	不明	済衆院主事(1886～90年)

注:1)『大韓帝国官員履歴書』などの資料を参考に確認できた者のみである。2)金宜煥は「朝野新聞」には載っていないが、1886年6月14日付で済衆院主事から済衆院付設医学校の学生となった。3)科挙歴が不明な者も彼らの職歴から鑑みるといずれの科挙に合格したと考えられる。4)全学生の医学校での修学期間は不明である。

資料:①国史編纂委員会編『大韓帝国官員履歴書』、探究堂、1971。②李光麟『韓国開化史研究』、一潮閣、1969。③Park-HyoungWoo『韓国近代西洋医学教育史』、青年医師、2008、pp.79-90より筆者作成。

## 6. おわりに

以上、朝鮮時代における医学教育の特徴、1880年代を中心に韓国初の西洋式病院と西洋式医学校の出現過程、そして韓国初の西洋医学教育の限界性をみてきた。

朝鮮時代の医師はほぼ中人階級から輩出されたが、当時の中人出身の若者の中には医療業より訳官業などに目を向ける者が多かった。これは、朝鮮時代の医師は今日のように社会的経済的地位が保障されるほど、若者の憧れる職業ではなく、むしろ苦勞する職業であったことを物語っている。しかし、当時、朝鮮全道にわたり医学を勉強する生徒の数は3,000人を超えている。彼らは所定の教育を受け、定期試験あるいは医科試験を受けねばならなかった。この試験体制が科挙制度であり、中央政權的な朝鮮社会を支えてきたといえる。中人階級の若者は立

<sup>54)</sup> D.L.Gifford 前掲書、p.308. 'On the departure of Dr. Allen to America in 1887 the nature of the institution was changed to that of a school for the teaching of English, and so continued for the space of two years.'



身出世のためには両班階級弟子と同じく、この科挙試験を乗り越えねばならなかった。

1880年代に韓国初の西洋式医学校が胎動したものの、科挙制度は依然として官職の登竜門であったため、済衆院付設医学校の学生たちは西洋医学教育を受けながらも科挙試験準備をしなければならなかった。500年以上続いた科挙制度の廃止は1894年のことである。1880年代、教育体制の抜本的な改革が先行されなかった状況下では、アメリカ北長老会派中心の宣教医たちの西洋医学教育は砂上の楼閣に過ぎず、医学校は2年足らずに英語学校へと姿を変えざるを得なくなったのである。また、アメリカの対朝鮮政策が消極的なものであったこと、済衆院と付設医学校の運営が二重構造下にあったこと、そしてアメリカ北長老会派内部で提起された批判<sup>55)</sup>などが相まって、韓国初の西洋式医学教育は目標軌道に乗らず、中断せざるを得なくなったのである。

---

<sup>55)</sup> 異教徒である朝鮮政府の支援下で済衆院付設医学校が運営されていることに対する批判。F.H.Harrington 著、李光麟訳『開花期の韓美関係』、一潮閣、1993、p.82.

